

瞠目から半眼へ—ガンダーラにおける思惟像の始まり— Transition in ancient artforms of the eye from open-wide to half-closed : Origin of thinking sculptures in Gandhara

○小林 茂樹¹⁾, 長田 典子²⁾

(¹⁾ 形相研究所、²⁾ 関西学院大学)

E-mail: kobayashi@keisolabs.co

1. はじめに

私たちは前報で、主として飛鳥期の仏陀像や菩薩像に関するアルカイックスマイル説について、その源流である、古代ギリシャ・アルカイック期クーロス像の表情と、古代インドから中国を経て日本の仏像にいたる微笑像を、眼と口角角度の造形の連関から検討し、上記の説明は、統合的な顔表情造形の視点よりすれば、当を得ていないと結論した[1]。

ここで私たちは、クーロス像の瞠目と微笑とを組合せた造形は、統合的な表情として理解し難いとしたが、この結論について、古代メソポタミアの瞠目は神性、永遠性を表す造形であるとの指摘を、西洋美術史家より受けた[2]。このことは、クーロス像の顔造形を、現代感覚に基づいて解釈する観点自体に問題があったことを意味する。

そこで、私たちは、古代メソポタミア、古代エジプト、古代インドから、古代ギリシャを経て、ガンダーラとマトゥラーにおける仏像の起源にいたる顔の造形について、眼と口唇の造形を通覧した。

2. 古代彫像の眼と口唇の造形

(1) 古代メソポタミア (紀元前 3500 年ころより) : 眼裂全周を太い輪郭で際立たせた瞠目の彫像を多く遺した (図 1、BC 2500 年頃) [3]。この限取瞠目造形は神性の表象とされ、魂の窓とも称された。上昇した口角は、瞠目と微笑の共存を示す。

(2) 古代エジプト : ツタンカーメン黄金のマスク (BC 1330 年頃) を代表に、眼裂全周の太い線描例が彫像や壁画に多数遺る。しかし、大多数は口角上昇がなく、微笑の表象が見られない。

(3) 古代インド : 最初期のインダス文明 (紀元前 2000 年以上前～) 以降一貫して、眼裂全周線描は見られず、古くより、眼裂半開例がある (神官石像、モヘンジョダロ) [4]。上記の古代 2 大地域との宗教的、思想的な背景の大きな違いを示す。

3. 仏像の創始

インドのクシャーーン朝 (AD 1 世紀中ごろ～) 期に、仏陀像を人間に近い像として表象する仏教彫刻がガンダーラ地域とマトゥラー地域で始まった。

(1) ガンダーラ像 : ヘレニズム様式の衣服をまとう片岩像の眼の造形はほぼ半開で、瞠目造形は見られない。後続のストゥッコ像は、上瞼の下端が更に降下し、思惟の姿に作られた。「何事かを思う」姿は、仏陀自身が神ではなく、「何事か」を人々に示す媒体であることを示すものと考えられる (図 2 [5])。

この思惟する造形様式は、西域を経て日本に至る北伝ルートでも、南インドを経て東南アジアに至る南伝ルートでも引継がれた。

(2) マトゥラー像 : インド風の衣を片肌脱ぎとした赤色砂岩像の眼の造形は、初期ほど開口度が大きく、ガンダーラ像との明らかな造形思想の違いを示唆する。口唇は口角上昇の微笑造形を示す[1]。この様式は、以降の造仏文化に継承されなかった。

4. まとめ=初期仏教彫刻の仏陀像不在から

最初期の仏教彫刻 (ガンジス河流域のシュンガ朝期 (BC180 年～) 以降) は、仏陀を法輪や菩提樹等の象徴で表し、人格像としなかった。それらの象徴は、人々を仏の世界に誘導する媒体に過ぎなかった。

象徴は神ではない。仏陀も神ではない。ガンダーラ以降、仏像は半開の眼でその世界への思惟を表した。

いっぽう古代のメソポタミアやエジプトの瞠目造形は、眼縁をことさらに強調し、神や死者そのものを、永遠性において表現するものであった。



図 1



図 2

5. 文献

[1] 小林茂樹、長田典子：日本顔学会誌、Vol.16, no.2, 55-68, 2016. [2] 辻 成史：私信、2017. [3] MIHO MUSEUM: いにしへのほほえみ、2007. [4] 宮治 昭：インド美術史、吉川弘文館、2009. [5] 同上：ガンダーラ美術とパーミヤン遺跡展、静岡新聞、2007.